

大友時代を 生きた人々



鹿毛 敏夫

高橋鎮種

高橋鎮種(紹運)は、16世紀後半の大友氏最盛期を支えた重臣の一人です。特に、戸次鑑連(道雪)とともに、筑前国の平定・統治に活躍しました。元々の名は吉弘鎮理で、大友氏重臣の吉弘鑑理を父に持ちます。

九州進出をめぐり毛利氏と大友氏の抗争中、永禄9(1566)年、大友氏に従っていた筑前国の領主高橋鎮種が、毛利氏方に寝返りました。数年間の小競り合いを経た同12(69)年、九州から撤退した毛利氏の後ろ楯を失った鎮種は、大友氏方に降ります。そこで、当主大友義鎮(宗麟)は、鎮種の高橋家督を剥奪し、その跡を吉弘鎮理に継がせました。形式上、鎮理は鎮種の養子となり、「高橋鎮種」を名乗ります。さらに、鎮種が築いて本城としていた宝満城(福岡県太宰府市・筑紫野市)と、その支城の岩屋城(同太宰府市)を領有、後に入道して「紹運」と号したのでした。

高橋紹運の子には、統虎と統増がいました。このうち統虎は、男児のなかった戸次鑑連からの希望を受けて、その養子となります。鑑連の娘蘭千代と結婚、名を戸次統虎、後に立花宗虎などに改めています。そして天正年間(1570年代)に、高橋紹運と統虎・統増の3人は、度重なる合戦に相まみえることになります。九州を北上する島津氏およびそれと連携した秋月氏と、大友氏方の合戦が、筑前国要衝の宝満・岩屋両城を巡って繰り広げられたからです。

天正14(86)年7月、島津軍が筑前国に侵入すると、紹運は最前線の岩屋城に籠城し、その背後の宝満城を次男統増、博多を守る立花城(福岡市東区・新宮町・久山町)を統虎に守らせ、数々の大軍を迎え撃つこととしました。この時、統増は、父に宝満城へ退いてともに籠城することを勧めたものの紹運は聞き入

主に忠義尽くし壮絶な戦死

れなかったといえます。紹運は、敵の開城勧告を拒み、敵軍の猛攻に耐えた後に、城兵とともに討ち死にを遂げました。現在、岩屋城跡には、本丸・二の丸・三の丸の痕跡が残り、本丸跡に「嗚呼壮烈岩屋城址」の石碑、二の丸跡に紹運の墓があります。最期まで大友家に忠義を尽くして玉碎・壮絶な戦死を遂げた紹運の生きざまが、今に語り継がれています。



岩屋城跡の石碑と眼下の太宰府市

一方、戸次家を継いだ長男の統虎は、その後の曲折を経て、江戸時代初期に筑後柳川藩初代藩主となり、立花宗茂の名で広く知られることになります。福岡県柳川市の臨濟宗妙心寺派天聖寺は、2代藩主立花忠茂が紹運の菩提を弔うため、寛永年間(17世紀前半)に建立したのが始まりといわれます。(名古屋学院大学国際文化学部教授)